

総合小売業における転倒対策の実際

河津 雄一郎
株式会社平和堂

総合小売業である当社で発生する労働災害のうち、最も多くを占めるのは「切れ・こすれ」と「転倒」である。切れ・こすれは、包丁やカッターナイフのようなむき出しの刃物を日常的に使用しているため発生する頻度は最も高いが、重症災害につながるものは少ない。しかし、転倒は骨折をはじめとする重症災害につながりやすいため、転倒対策は喫緊の課題である。特に、労働者のうちパート・アルバイト社員は、中高年の女性労働者がその多くを占める。このセグメントは、加齢による筋力や平衡感覚の低下のために転倒しやすいことや、閉経後の骨密度低下のために転倒したときの骨折リスクが高いこと（いわゆるロコモティブシンдрーム）が知られており、実際当社においても転倒による重症災害のほとんどを中高年女性労働者が占めている。そこで女性労働者を対象に、ロコモティブシンдрームが転倒災害の発生や重症化に関連するかを検討するため、運動機能評価（開眼片足立ち、閉眼片足立ち、ファンクショナルリーチ）と、転倒経験に関するアンケート調査を行うとともに、さらに健診データと突合することによって、転倒しやすい個人要因を分析した。しかしながら、医学的に対策可能な転倒関連要因を見出すことができず、健康管理の面から効果的に転倒を予防するのは難しいと考えざるをえなかった。

また、転倒災害の発生状況を部門別に詳細に検討したところ、特にデリカ部門で転倒災害が多いことがわかった。そこで、デリカ部門の転倒を作業環境管理・作業管理の面から重点的に対策することとした。作業環境管理・作業管理は、施設の改修や作業標準の変更などが必要となり、健康管理部門だけでは対応できないことから、店舗の設備を担当する部門や制服を担当する人事部門、業務のマニュアルを担当する部門など関連部署合同で全社的に検討を行った。まず役員から全店長に対して、デリカ部門の転倒が多いことや全社的な対策の必要性を周知し、全店舗への床材のはがれや換気扇の設置状況のような職場環境のヒアリング、代表的な店舗の職場

巡視、転倒が少ないという同業他社への視察等を行い、対策を検討した。そのなかで、フライヤーの油が床面にはねて床面が滑りやすくなっていることが転倒の大きなリスクになっているのではないかと考えられた。そこで、耐滑性のより高い作業靴の導入、油がはねにくい作業マニュアルへの変更、床材の張替え等を実施した。その結果、全社ではその後のデリカ部門の転倒労災が対策前と比べて約38%減少した。

以上のように、転倒対策には作業環境管理、作業管理が重要であるため、安全衛生部門だけでなく全社的に取り組む必要がある。

略歴

河津 雄一郎（かわつ ゆういちろう）

1998年 産業医科大学医学部卒業

1998年 国立病院東京医療センター内科系臨床研修医

2000年 ソニー株式会社厚木テクノロジーセンター産業医

2001年 産業医科大学産業生態科学研究所 産業保健経済学研究室 産業医学専門修練医

2003年 財団法人京都工場保健会

株式会社平和堂 健康管理室 統括産業医

2017年 株式会社平和堂 健康サポートセンター 統括産業医